

杜甫年表(稿) —— 教学のための ——

古川 末喜

A Note of a Chronological List of Dufu (712-770)'s Life

Suekii FURUKAWA

『要旨』

杜甫は、李白とともに高校から大学まで、授業のなかで取り上げられることの最も多い詩人であろう。それにもかかわらず、教員や学生、あるいは一般の漢詩愛好者が、日本語で簡単に参照できる、独立した杜甫年表なるものが無かった。そのため、単行本として出版された各種の杜甫伝や杜甫詩選の、巻末に附載する年表を取りだして参照する、といった状況だったと思われる。私自身がそうであった。そこで本稿は、その不便さにかんがみ、甚だ簡略に過ぎ、また誤り多きことを承知しつつ、暫時、教学や独学の用に間に合わせるものとして、敢えて公にするものである。したがって本稿は将来必ずや随所訂正し、大幅に補充されるべきものである。その時まで本稿が、仮の用をいくらかでも果たすことができれば幸いである。

なおいくつかの作品の制作時期を年表に書き込んでいるが、これはあくまで一つの目安として考えていただきたい。作品の編年には異説が相当に多いからである。

〔凡例〕

本文中の年月日は、すべて中国の旧暦(太陰太陽暦)であり、数字の表記には漢数字を用いた。

したがって本文中で季節を表す際には、形式的に春は一月・二月・三月、夏は四月・五月・六月、秋は七月・八月・九月、冬は十月・十一月・十二月とみなした。また閏月がある場合もその中に含めた。

杜甫の年齢を掲げて標題とした。年齢は数え年による。

その横には、その年のユリウス暦の年月日を、『唐代の暦』(平岡武夫、同朋舎、一九七七年)によって、半角文字のアラビア数字で示した。ユリウス暦を、現行のグレゴリオ暦に換算するには、少なくとも杜甫のこの年表の範囲内では、四日を加えればよい(上掲『唐代の暦』一九頁による)。

閏月がある年は、その月を「閏九月」のように示した。また各年の総日数を括弧内に記した。

杜甫の年齢の下に、西暦年を括弧内にいれたが、それはある程度の誤差を含むものとする。たとえば乾元二年、48歳の、仮に十二月十五日に成都に到着したとすれば、その日はユリウス暦では760年の1月7日にあたる。しかし標題では759年と表示されているが如きである。

『唐詩選』、『唐詩三百首』、岩波文庫『杜甫詩選』（黒川洋一）に収録する詩、及び高等学校の教科書に取りあげられる詩については、その制作年を年表に書き込んだ。ただし、高校の教科書中の詩については、もっぱら『漢詩・漢文解釈講座』第三卷「漢詩Ⅲ」唐詩・下（昌平社、一九九五年）所収の杜甫詩の詩題に依った。その石川忠久氏の序文「刊行にあたって」には「現行のすべての高校教科書中の漢文教材を取り上げ」とある。従って、上掲書出版後、もしもそれ以外に新たに教科書に採用された詩があれば、それについては、記載が無いことをお断りしておかねばならない。

地名は原則として**古名**を用いた。古今の名称が異なるものについては、おおよその**現代の地名**を括弧内で示した。

漢字の字体は、旧字、異体字、俗字などは、すべて日本語の常用漢字に統一した。また、醬のように、正字であつても慣用字体の醬に換えたものもある。

詩題の前の四桁のアラビア数字は、清の仇兆鰲注『杜詩詳註』での出現の順番を表す。前一桁がその巻数、後二桁がその巻数内での順番を表す。

この詳注本は、細かく言えばその並べ方に問題点もあるが、おおかたは時代順に並んでいるので、その数字を見ただけで、どの時期の作品か、おおよその見当をつけることができる。鈴木虎雄訳注の『杜甫全詩集』は詳注本を底本とするので、巻数と巻内での並び順は詳注本と一致する（続国訳漢文大成『杜少陵詩集』を日本図書センターが復刻）。

〔参考文献〕

清の仇兆鰲『杜詩詳註』の編年を基礎に置き、基本的にそれに依拠することの多い陳貽焮『杜甫評伝』（上海古籍出版社、一九八二～一八年）と、さらに陳貽焮の研究をも踏まえる『杜甫詩全訳』（韓成武・張志民主編、河北人民出版社、一九九七年）を、最も参照した。

また清の楊倫『杜詩鏡銓』の編年を基本に据える張忠綱輯録の「杜甫年譜簡編」（蕭滌非主編『杜甫全集校注』第十二冊、附録一（人民文学出版社、二〇一四年）を随時比較参照した（これは『杜甫大辞典』二〇〇九年、山東教育出版社、所収の同氏の年譜をほぼそのまま転載したもの）。いちいち明記しなかったが、近年の研究成果も適宜取り入れた。

ただし四川省文史研究館編の『杜甫年譜』は、一步踏み込んだ詳細な伝記記述が多く、甚だ興味をそそられるが、根拠薄弱の憶測に拠ることが多いため、あえて採用することはしなかった。

人物に関しては、陳冠明・孫愷婷『杜甫親眷交游行年考 外一種 杜甫親眷交游行年表』（上海古籍出版社、二〇〇六年）を多く参照した。

なお拙著『杜甫農業詩研究—八世紀中国における農事と生活の歌』（知泉書館、二〇〇八年）に附した「杜甫年表」（同書四一九～四二五頁）上の誤りは、本稿をもってその訂正に替えることとする。

杜甫生涯の行路図で、最も信頼のおけるものとして、莫礪鋒『杜甫評伝』（南京大学出版社、一九九三年）の巻首に附す「杜甫行踪示意图」を参照した。なおウェブ上の『唐代詩人行吟地圖』李白、杜甫、韓愈（元智大学中国語文学系）等は、グーグルマップの上に唐代の地名が表示され、概略の位置関係を知る上で有益である。

1歳(712) 睿宗・景雲三年、大極元年、延和元年、玄宗・先天元年壬子

712年2月12日〜713年1月30日 (354日)

河南の鞏県(一説に洛陽)に生まれる。

祖先発祥の地は京兆の杜陵(西安市東南)であるが、東晋南渡の際に襄陽(湖北省)に移住し、曾祖父の杜依芸の時より鞏県に住む。

遠祖として、西晋の政治家、大將軍、春秋学者として著名な杜預(二二二〜二八四)を仰ぐ。

祖父は、「文章四友」の一人として文才を称され、初唐期の宮廷詩人として有名な杜審言。杜甫の生まれる四年前、中宗の景竜二年に死去。律詩の形成に寄与した。官は尚書膳部員外郎(従六品上)に至る。修文館学士にあてられ、死後、著作郎(従五品上)を追贈される。杜甫は祖父を終生誇りとする。

父は杜閑。地方の中級官僚で、官は奉天県令、兗州司馬(従五品下)等。

父方の叔父の杜専、杜登は、それぞれ開封県、武康県の県尉で、地方の下級官僚。没落しつつある家門で、杜甫以後正史に伝を立てられる者が出なかった。

母の崔氏は名門の一族で、母方の祖父母とも、三代または四代遡れば唐の王室に連なる。

幼少にして実母に死なれ、父は再婚して地方官で外勤。幼少期を洛陽の父方の叔母のもとで過ごす。

兄は夭逝し、実質的に長兄。四人の弟(穎・観・豊・占)と一人の妹は、みな継母盧氏の子。

2歳(713) 玄宗 先天二年、開元元年 癸丑

713年1月31日〜714年1月20日 (355日)

(十二月、開元と改元)

3歳(714) 開元二年 甲寅 (閏二月)

714年1月21日〜715年2月8日 (384日)

幼少のころ大病を患い、父方の叔母の介護によって一命を取りとめる。杜甫は記憶せずという。かりにここに置く。

4歳(715) 開元三年 乙卯

715年2月9日〜716年1月28日 (354日)

6歳(717) 開元五年 丁巳

717年2月16日〜718年2月4日 (354日)

このころ河南の鄆城で公孫大娘が剣器・渾脱を舞うを見る。一説に開元三年。

7歳(718) 開元六年 戊午

718年2月5日〜719年1月25日 (355日)

詩文を作りはじめる。

9歳(720) 開元八年 庚申

720年2月13日〜721年1月31日 (354日)

大字の書を習う。父も祖父も名筆家で、杜甫は瘦硬の書風を好む。年少のころは病気がち。家は貧しかったが、勉学を好む。

14歳(725) 開元十三年 乙丑

725年2月18日〜726年2月6日 (354日)

このころ洛陽で文人の仲間入りをし、文才を称揚される。

岐王李範(睿宗帝の第四子)、殿中省長官の崔滌(宰相崔湜の弟)の屋敷に出入りし、玄宗に寵愛される李龜年の歌をしばしば聞く。

15歳 (726) 開元十四年 丙寅

726年2月7日～727年1月26日 (354日)

このころ身体はすこぶる壮健。

19歳 (730) 開元十八年 庚午 (閏六月)

730年1月23日～731年2月10日 (384日)

郇瑕、即ち蒲州猗氏(山西省臨猗県)に遊ぶ。

20歳 (731) 開元十九年 辛未

731年2月11日～732年1月31日 (355日)

呉越(江蘇、浙江省)への漫遊の途に上る。引き続き二十三歳まで呉越に遊ぶ。足跡は江寧(南京)、呉国の旧蹟(蘇州)、杭州、越州(紹興)、剡溪(嵯州)、西陵(蕭山)、天姥山(新昌)等に至る。この時日本に渡ることができなかったことを、後年まで残念がる。

24歳 (735) 開元二十三年 乙亥 (閏十一月)

735年1月29日～736年2月15日 (383日)

呉越より洛陽に帰る。

一説に春、『0112』夜宴左氏莊』を作る。また三十歳から三十三歳ころ洛陽での作とし、異説多し。

故郷鞏県の県試、洛陽の河南府府試に合格し、翌年春、科挙を受験する。旧説ではこの年、科挙を受験するも落第。

このころ『0101』遊竜門奉先寺』を作る。一説に三十歳ころの作。

25歳 (736) 開元二十四年 丙子

736年2月16日～737年2月3日 (354日)

前年の県試、府試合格を経て、(一説に、そのまま洛陽での)科挙の進

士科を受験するも落第。

兗州司馬の任にあった父のもとにいき(山東省兗州市)、齊趙(山東、河北省一帯)に遊ぶ。足跡は任城(濟寧)、叢台(邯鄲)、青丘(広饒)等に及ぶ。

このころまたは二十九歳までに『0102』望岳(岱宗)』『0103』登兗州城樓』を作る。

蘇源明と交わり終生の友となる。

〔張九齡が辞めさせられ、李林甫が宰相。いわゆる「開元の治」の衰退が始まる象徴とされる〕

26歳 (737) 開元二十五年 丁丑

737年2月4日～738年1月24日 (355日)

引き続き、二十九歳まで齊趙に遊ぶ。

28歳 (739) 開元二十七年 己卯

739年2月13日～740年2月1日 (354日)

齊趙に遊ぶ。

汶水(兗州流域)で高適と知り合う。

29歳 (740) 開元二十八年 庚辰

740年2月2日～741年1月21日 (355日)

引き続き、齊趙にあり。兗州司馬の父のもとに行く。

このころ『0104』題張氏隱居、二首』を作る(一説に開元二十四年)。

30歳 (741) 開元二十九年 辛巳 (閏四月)

741年1月22日～742年2月9日 (384日)

洛陽に帰り、偃師県首陽山のふもとに、新宅「土婁莊」(陸渾莊)を建

てる。

仲春の寒食節に遠祖の杜預を祭る。

このころ司農寺の少卿(従四品上)の楊怡の娘と結婚。一説に三十五歳のころ。以後死ぬまで連れ添う。一説に杜甫五十六歳時に夔州で死ぬ。

このころ弟の杜穎は、齊州臨邑県の下級職の主簿の任にある。三十歳前後のころ『0109』房兵曹胡馬』『0110』画鷹』を作る。

31歳(742) 玄宗・天宝元年 壬午

742年2月10日〜743年1月29日 (354日)

〔正月、天宝と改元〕

洛陽にあり。

幼少より杜甫を世話した父方の叔母が洛陽仁風里で死に、その墓誌を作る(万年県君)。

このころ、あるいは翌年ころまでに父死す。

33歳(744) 天宝三年 甲申 (閏二月)

744年1月20日〜745年2月5日 (383日)

引き続き、洛陽にあり。

五月、父方の祖母(祖父杜審言の後妻)が死に、偃師に葬られ、その墓誌を作る(范陽太君)。

夏、洛陽で、この年宮廷から放逐されて野にあった李白と、知り合う。

秋、梁宋(河南省商丘市一带)に至り、李白・高適と遊ぶ。

道士の華蓋君に道教を学ぼうと、道教の聖地王屋山(河南省濟源市)に遊ぶが、その人すでに世になく実現せず。

34歳(745) 天宝四年 乙酉

745年2月6日〜746年1月25日 (354日)

齊・魯(河南、山東省)に遊ぶ。

春、李白と兗州泗水(山東省濟寧市)に遊ぶ。

弟の杜穎に会いに齊州臨邑(山東省德州市)へ行く。

夏から秋、齊州・臨淄郡(山東省濟南)の歴下などで、李邕、李白、高適らと遊ぶ。

秋、兗州にゆく。李白もまた来たり、ともに遊び、二人の交情はますます深まる。

李白とともに、道教を学ぶため、董道士を蒙山(山東省臨沂市平邑県)に訪ねる。

秋末から冬初、兗州・魯郡の東の石門で李白と別れ、以後杜甫は終生李白を慕う。

洛陽へ帰る。一説にさらに長安へ行く。

〔八月、玄宗が楊玉環を貴妃となす。時に玄宗六十一歳、楊貴妃二十七歳〕

35歳(746) 天室五年 丙戌 (閏十月)

746年1月26日〜747年2月13日 (384日)

長安にあり。汝陽王李璣(睿宗の孫)、駙馬都尉の鄭潜曜(玄宗の女婿)に従い遊ぶ。

『0136』春日憶李白』『0127』送孔巢父謝病歸遊江東、兼呈李白』を作る。

(一説に二首ともに翌年の作)
このころ、またはこの年以後に『0201』飲中八仙歌』を作る。

36歳 (747) 天宝六年 丁亥

747年2月14日～748年2月3日 (355日)

長安にあり。

天子の主催する臨時の官吏登用試験の制科があり、受験する。李林甫の策謀で、受験者は元結なども含め全員が落第。杜甫の受験は十二、三年ぶり。今回は毎年試験のある進士科ではなく不定期の制科を受験。

これより以後数年間は、高位の知人や有力者に詩を贈り、あるいは朝廷に賦を献じたり等、求職活動に奔走。

37歳 (748) 天宝七年 戊子

748年2月4日～749年1月22日 (354日)

長安にあり。

38歳 (749) 天宝八年 己丑 (閏六月)

749年1月23日～750年2月10日 (384日)

長安にあり。

安西四鎮節度使の高仙芝が入朝。『0202「高都護廳馬行」』を作ってその馬を褒める。

冬、洛陽に帰る。老子廟に謁し『0203「冬日洛城北、謁玄元皇帝廟」』を作る。

このころ又は前年、僱師の本宅に帰省したとき、たびたび河南尹（従三品）韋済の訪問を受ける。

〔府兵制が廃止される〕

39歳 (750) 天宝九年 庚寅

750年2月11日～751年1月2日 (355日)

長安に戻る。

鄭潜曜（玄宗の女婿）の依頼を受け、公主の母、皇甫淑妃の碑文を作る。

太常卿（正三品）・翰林学士の張垪（玄宗の女婿）に詩を送り、引き立てを求める。

河南尹から尚書左丞（正四品上）に移り朝廷勤務となった韋済に『0132「贈韋左丞丈濟」』を送り、引き立てを求める。

広文館博士の鄭虔と知り合い、終生の友となる。

求職活動の一環として『2108「鵬賦」』を奉るも、沙汰無し。一説に天宝十三年。

仕官を求める者のための制度にもとづき、冬、三大礼賦『2402「朝献太清宫賦」』『2403「朝享太廟賦」』『2404「有事於南郊賦」』を、延恩匾という投書箱に投じる。一説に翌年。

大晦日を、いとこの杜位（李林甫の娘婿）の家で過ごす。一説に翌年。このころ長子の宗文が生まれる。小名は熊児。

このころまでに、七歳から書きはじめた韻文・散文の作品は千余篇。後年そのほとんどを破棄する。

40歳 (751) 天宝十年 辛卯

751年1月3日～752年1月20日 (354日)

長安にあり。

前年冬に奉った三大礼賦が、崔国輔と于休烈に賞賛されて、玄宗の眼にとまり、集賢院に待機して、皇帝の試問・下問に備えるよう、命ぜらる。

〔劍南節度使の鮮于仲通がチベット・ビルマ系の南詔国（雲南地方）の攻撃に大敗。楊国忠は敗戦を隠蔽し、農民兵を強制的に徴発する〕

このころ、または翌年に『0211「兵車行」』を作る。

秋、マラリアを病む。

〔高仙芝の率いる唐軍が、タラス川の戦いでアッバース朝のイスラム軍に大敗〕

41歳(752) 天宝十一年 壬辰 (閏三月)

752年1月21日〜753年2月7日 (384日)

長安にあり。

前年の集賢院待制によって中書試が行われ合格。「出身」の資格を得、「候選三年」(任官への三年待ち)に入る(韓成武・韓夢沢)。一説に中書試は前年。

暮春、しばらく洛陽に帰る。

諫議大夫(正五品上)の鄭審に詩を送り、引き立てを求める。

秋、高適・薛稷・岑参ら長安の慈恩寺塔(大雁塔)に登り詩を作る。また、儲光羲、杜甫も登り同じく『0207「同諸公登慈恩寺塔」』を作る。

このころ『0215「貧交行」』を作る。

〔李林甫死す。かわって楊貴妃の縁者にあたる楊国忠が宰相となる〕

42歳(753) 天宝十二年 癸巳

753年2月8日〜754年1月27日 (354日)

長安にあり。

京兆尹(従三品)の鮮于仲通に詩を送り、引き立てを求める。

春、楊貴妃の姉と宰相楊国忠の不正常な男女関係を批判する詩『0222「麗人行」』を作る。

夏、広文館博士の鄭虔と、何將軍の別荘に遊び『0221「陪鄭広文、遊何將軍山林、十首」』を作る。

夏、高適が河西節度使哥舒翰の書記として、涼州武威(甘肅省)に赴くの見送り『0213「送高三十五書記、十五韻」』を作る。(一説に既に節度使の書記であった高適が、任地に戻るのを見送ったとする)

〔第十一次遣唐使が到着〕

43歳(754) 天宝十三年 甲午 (閏十一月)

754年1月28日〜755年2月15日 (384日)

長安にあり。

家族を洛陽から呼び寄せ、長安城外東南で長安城に近接する古の下杜城(西安市杜城村)あたりに居を構える。それまでは長安城内で一人寄寓の身で、何度か洛陽に帰省していた。

春、再び何將軍の別荘に遊び『0302「重過何氏、五首」』を作る。

春、『0304「醉時歌」』を作って、広文館博士の鄭虔に贈る。

夏、下杜城の住まいに、唐の宗室で太子家令(従四品上)の李炎の訪問を受ける。

夏、岑参兄弟と景勝地の湖(漢陂)で舟遊びをし『0306「漢陂行」』を作る。

この時期、河西節度使の哥舒翰の幕府の書記官に、職を求めようとする。

秋、長安一帯が記録的な長雨。物価が騰貴し、生計が苦しく、妻子を引き連れ、長安の北、奉先県に行き、妻の親戚で奉先県令の楊慧のもとにあずける。

おそろくこの年の秋、次男の宗武生まれる。一説に前年の秋。このころまでに娘は三人。

秋、同族の杜済の家を訪問し食にあずかり『0318「示従孫済」』の詩を作る。

おそろくこの年の冬、咸陽県、華原県の友人等に詩を送り窮状を訴える。

冬、玄宗に『2406「封西岳賦」』を奉るも沙汰無し。

おそろくこの年の年末、マラリアの病が癒える。

44歳(755) 天宝十四年 乙未

755年2月16日〜756年2月4日 (354日)

春から夏、長安にあり。

春、同族の杜勤が、科挙に落第して故郷に帰るのを送り、別れの宴で『0329「醉歌行（陸機二十作文賦……）」を作る。

宰相の韋見素に詩を送り、引き立てを求める。

秋、七月、妻子を訪ねて長安より奉先県に赴く。九月の重陽の節句過ぎまで滞在。

さらに白水県に行き、母方のおじの崔頊（白水県令）の家を訪ねる。

冬、十月、長安に帰る。

「候選三年」が明け、同州馮翊郡の河西県（陝西省渭南市合陽県）の尉を授けられるも就かず。

ついで、東宮つきの右衛率府兵曹参軍（正八品下）に任ぜられる。

冬、十月、安禄山の乱勃発の十一月九日以前に、再び奉先県に妻子を訪ねる。飢えのため幼女が死んでいた。

『0406「自京赴奉先、詠懷、五百字」を作る。

〔十一月九日、安禄山が幽州で挙兵。十二月十二日、洛陽陥落〕

〔玄宗は哥舒翰に、洛陽から長安へ入る中間点の要地、潼関を守らせる〕奉先県で家族と年を越す。あるいは年内に長安に帰り、正月を一人長安で過ごす。

安史の乱の直前または直後に『0409「後出塞、五首」を作る。

45歳（756） 天宝十五年、肅宗・至徳元年 丙申

756年2月5日〜757年1月24日（355日）

〔正月、安禄山、洛陽で大燕皇帝を称し国号を燕と定む〕

春、長安にあり。

実際に右衛率府兵曹参軍の職に就くのは、おそらくはこの春か。

初夏、家族を避難させるため再び奉先県に赴く。

五月、奉先県から家族を連れ、白水県の役人で母方のおじの崔氏に身を寄せる。

〔六月九日、潼関で哥舒翰が敗れる。十三日、玄宗らは長安から逃げ、数日後には反乱軍が長安を占領〕

白水県を離れ、避難民に混じり、遠い親戚の王礪一家と北に逃げる。

白水県の東北六十里の彭衙古城を過ぎる。坊州（黄陵県）の周家洼（通説では同家窪）の孫宰の家でしばらく世話になる。

七月中には鄭州三川県に至る。家族を三川県の羌村に住まわせる。通説では、羌村は鄭州洛交県（陝西省富県）とするが、確証はない。

〔七月十二日、皇太子李亨が靈武（寧夏回族自治区銀川市の南）で即位し、肅宗皇帝。改元して至徳元年〕

肅宗即位の報を聞き、羌村に家族を置き、肅宗の行在所の靈武に向かうとするも、反乱軍側に捕らえられ、長安に連行される。

通説ではこの時、鄭州よりさらに北に向かい、延州（延安）を経て、蘆子関（陝西省延安市の西北）を出で、その後靈武に向かい、途上で反乱軍に捕らえられたとするが、憶測の域を出ない。

軟禁とは言え、城内での行動は、地位が低かったためか、かなり自由。妻子を想う詩『0414「月夜」』を作る。

〔肅宗の行在所が靈武から、九月二十五日、順化に至り、十月三日彭原に至る。〕

十一月、永王璘が四道節度都使を領し、江陵に軍を置き、李白が幕府の書記として招かれる。十二月、永王璘反す〕

十一月、永王璘が四道節度都使を領し、江陵に軍を置き、李白が幕府の書記として招かれる。十二月、永王璘反す〕

46歳（757） 至徳二年 丁酉（閏八月）

757年1月25日〜758年2月12日（384日）

〔二月、安禄山が安慶緒らに暗殺され、安慶緒が即位〕

反乱軍の占拠する長安城内にあり。『0415「哀王孫」』『0427「哀江頭」』『0421「春望」』『0423「憶幼子」』『0425「遺興（驥子）」』等を作る。

〔二月、肅宗の行在所が彭原より鳳翔（陝西省宝鸡市東北部）に移る。〕

これ以後、長安を脱出して鳳翔の唐軍に帰する者が日夜絶えず」

〔二月、高適、来瑱、韋陟の軍が永王璘を打つ。三月、李白が潯陽の獄につながれ、翌年春、夜郎に流される〕

四月、長安城西門の金光門より脱出し、鳳翔の行在所へ向かう。【0503】

自京竄至鳳翔、喜達行在所、三首』を作る。

五月、鳳翔の行在所で左拾遺（従八品上）を授けられる。

五月、元の宰相、房琯をかばって諫言し、肅宗の逆鱗に触れる。尚書省の刑部・御史台・代理寺の三司合同の最高司法会議にかけられる。死刑の可能性があったが、宰相張鎰・御史大夫韋陟・崔光遠・顔真卿等が弁護し許される。

六月一日、許されてのち、肅宗に感謝状を奉る。左拾遺の職に復す。

六月十二日、左拾遺の仕事として、杜甫等五人は岑参を諫職に推薦。

閏八月、行在所を去って家族のもとへ帰省するよう命じられ、鄜州へ向かう。

鳳翔からは、麟遊、汾州（彬県）、宜君、坊州（黄陵県）等を通して、鄜州の羌村に至る。

その途次、宜君県の玉華宮に立ち寄り【0521】玉華宮』をつくる。

また太宗の陵墓を経由して【0524】行次昭陵』を作り、およそ二ヶ月後、

鄜州より鳳翔に戻る途次、再び太宗の昭陵を通過して【0525】重經昭陵』を作る。（一説にこの二首を、天宝四年と九年、それぞれ洛陽から長安へ行くとき、昭陵にも立ち寄り、その時作ったとする）

羌村で家族と再会を果たし【0523】北征』【0522】羌村、二首』を作る。

〔九月二十八日、元帥広平王李俶（後の代宗）は李嗣業・郭子儀・王思礼らと、ウイグルや西域兵の力を借り、長安を回復。ついで十月、洛陽を回復〕

十月、許しが出て、鄜州から鳳翔に呼び戻され、左拾遺の職に復す。

十月二十三日、肅宗が鳳翔より長安に入京するに際し、肅宗に扈從し長

安に戻る。通説では、十一月に鄜州から長安へ（家族をともなって）呼び戻されたとする。

長安では城内東南隅の曲江池の西あたりに居す。（長安での杜甫の居所については求職活動期、洛陽から家族を呼び寄せた時、賊軍占領下での時期、左拾遺勤務の時期で、それぞれ異説が多い）

十一月三日、朝廷の冬至節の式典に左拾遺の侍従官として参列。

十二月、広文館博士の鄭虔が、左遷されるに際して【0529】送鄭十八虔貶台州司戸、傷其臨老陷賊之故、闕為面別、情見於詩』を作る。

〔十二月、太上皇（玄宗）が成都より長安に帰る〕

47歳（758）至徳三年、乾元元年 戊戌

758年2月13日〜759年2月2日（355日）

引き続き長安にて左拾遺の職にあり。【0601】宣政殿退朝晚出左掖』【0602】紫宸殿退朝口号』【0603】春宿左省』等を作り、天子の近侍官としての朝廷生活を描く。

春、中書舍人の賈至の詩に、王維・岑参らと唱和。

〔二月、乾元と改元〕

三月、賈至が左遷される。

このころ、【0609】曲江、二首』【0610】曲江對酒』等、長安城内東南の曲江のほとり、虚無的、投げ遣りの詩を多く作る。

六月、房琯、嚴武が左遷され、同じ人脈の杜甫も華州（陝西省渭南市に属す）の司功参軍（従七品下）に左遷される。【0627】至徳二載、甫自京

金光門出間道歸鳳翔。乾元初、従左拾遺移華州掾、与親故別、因出此門、有悲往事』を作る。

秋九月、藍田県に行き王維、崔季重の別荘を訪ねるも、王維に出会えず。

【0634】九日藍田崔氏莊』【0635】崔氏東山草堂』を作る。

冬、華州から洛陽へ帰り、また故郷偃師県の陸渾莊へ帰省。

48歳（759）乾元二年 己亥

759年2月3日～760年1月22日（354日）

春、洛陽から華州へ戻り、任に就く。

華州への帰路、旧友の衛八処士に出会い『0628「贈衛八處士」』を作る。

帰路での見聞をもとに、三吏三別（『0701「新安吏」』『0702「潼関吏」』『0703「石壕吏」』『0704「新婚別」』『0705「垂老別」』『0706「無家別」』）を作る。

〔三月、史思明が安慶緒を殺し、四月、大燕皇帝に即位し、九月、洛陽を落とす〕

〔夏、長安一帯が旱魃にあい、飢饉が起こり、物価が騰貴〕

〔六月、右僕射の裴冕が成都尹・劍南節度副大使・本道觀察使となる〕

七月、華州の官を辞す。一説に免ぜられる。家族を（末弟の杜占も）ひきつれ秦州へ旅立つ。以後、長安、洛陽へは二度と戻らず。

辞官（一説に免官）の背景と経緯、秦州行きの動機、及び秦州での居所等については異説が多い。

秦州では城内に住む。あるいは現地で隠遁生活を送る親戚杜佐の東柯谷の草堂に住むとも。

また西枝村など、隠遁にふさわしい土地を捜す。

秦州へ流されていた長安大雲寺の贊上人と交流する。『0724「西枝村、尋置草堂地、夜宿贊公土室、二首」』を作る。

このころ『0714「夢李白、二首」』『0721「天末懷李白」』等、李白を想う詩を立て続けに作る。李白は三月、夔州まで来たところで赦免されるも、杜甫はそれを知らず。

『0713「佳人」』『0719「秦州雜詩、二十首」』『0720「月夜憶舍弟」』『0811「送遠」』を作る。

十月、秦州を去り、南の同谷（甘肅省成県）へ向かう。

秦州出発から同谷まで、連作十二首の紀行詩『0831「青陽峽」』『0836「鳳凰台」』等を作る。

同谷では、栗亭から鳳凰村に移り住み、ひと月も滞在せず。

十一月、『0837「乾元中、寓居同谷県、作歌、七首」』を作る。

十二月一日、同谷からさらに南へ、蜀道の難所を越え、成都へ向かう。

同谷出発から成都到着まで、十二首の紀行詩『0905「飛仙閣」』『0907「竜門閣」』『0910「劍門」』『0912「成都府」』等を作る。

年末、成都に到着。当初は浣花溪の畔の草堂寺に住む。

49歳（760）上元元年 庚子（閏四月）

760年1月23日～761年2月9日（384日）

春、成都尹・劍南西川節度使の裴冕の援助のもと、成都郊外の浣花溪のほとりで、住まい作りに着手し、親戚、友人らの援助で、暮春にはいちおう完成。いわゆる成都草堂（浣花草堂）。

春、諸葛亮の廟に詣り『0923「蜀相」』を作る。

草堂で『0926「有客（患気）」』『0927「賓至（幽棲）」』を作る。

このころ『0938「戲題王宰画山水図歌」』『0939「戲為韋僊双松図歌」』を作る。

〔裴冕が長安に帰り、尚書右僕射となる。三月、李若幽（一説に杜甫の母方の遠縁）がその後任となる〕

〔四月、名將軍李光弼（時に檢校司徒）が、史思明を河陽に破る。閏四月、上元と改元〕

夏、草堂で『0930「江村」』『0949「恨別」』を作る。

〔八月、房琯が、晋州刺史から漢州刺史に改められる〕

秋、彭州刺史の高適に生計の援助を求める。さらに高適が蜀州刺史として赴任して来たので、会いに行く。

さらに蜀州東南の新津に到り、裴迪と新津寺に遊ぶ。

冬、成都にあり。

50歳(761) 上元二年 辛丑

761年2月10日～762年1月29日 (354日)

正月、また新津に行くも裴迪と出会えず。

二月、成都草堂に帰る。

春、【0963】客至【1002】春夜喜雨【1004】江亭【1006】落日】を作る。

【二月、李若幽にかわり、崔光遠が成都尹・西川節度使】

【三月、史朝義が父の史思明を殺して、即位】

【四月、梓州刺史の段子璋、反す。五月、崔光遠は李奥と連合して乱を

平定し、高適も参軍】

夏、【1022】進艇【1043】贈花卿】を作る。

秋、生計の援助を求め蜀州青城に行くも当てが外れ、まもなく成都に帰

る。

秋、蜀州唐興県に行く。唐興県令の王潜に詩を書き、生計の援助を求め

る。

夏または秋、草堂の前の大木の楠樹が倒れ【1032】楠樹為風雨所拔歎】

を作る。

秋八月、台風で草堂の屋根が吹き飛ばされて雨漏りする。【1033】茅屋為

秋風所破歌】を作る。

成都少尹(副長官)の徐九(徐知道)が厚礼をもって草堂を訪れる。

冬、王侍御(王掄)が、成都尹を臨時に代行していた高適を伴い、草堂

を訪ねる。

招かれて蜀州に行く。阜江にかかる竹橋の完成を言祝ぐ。

十二月、杜甫最大の支援者で友人の嚴武が、この地方の行政・軍事の最

高長官(成都尹、劍南節度使)となる。

代行していた高適は蜀州刺史の任に戻る。帰任してきた高適を蜀州で迎

える。

成都に帰る。

この年、李白の消息を得ないことを心配し【1050】不見】を作る。翌年、李白死ぬ。

51歳(762) 代宗・宝応元年 壬寅

762年1月30日～763年1月18日 (354日)

春・夏、草堂にあり。

嚴武との交流が盛ん。嚴武は着任当初、杜甫の意見【2510】説旱】も

取り入れ比較的善政を行う。

二月、春社の祭日に、杜甫を家に招き入れた農夫が、嚴武の治政を賞賛

する。【1102】遭田父泥飲美嚴中丞】を作る。

三月、このころ【1065】重贈鄭鍊絶句】【1067】野望(西山)】を作る。

【四月、宝応と改元。太上皇(玄宗)崩御。ついで肅宗崩御し、代宗が

即位。この年、代宗は改元せず】

五月、嚴武が再び草堂を訪れる。嚴武に招かれ、郊外の草堂から成都城

内に赴く。

六月、代宗の治世となり、嚴武が長安に召しかえされる。

七月、嚴武を綿州まで送っていく、奉濟駅で別れる。【1117】奉濟駅、重

送嚴公、四韻】を作る。

【七月、高適が成都尹、西川節度使となる。翌年十二月まで】

徐知道が成都で乱を起こす。成都への帰路を阻まれ、綿州で涪江東津の

公館に住む。

綿州にしばらく滞在。涪江での打ち網の漁をみて【1119】觀打魚歌】【1120

】又觀打魚】を作る。

漢中王季瑀を頼り、綿州を去って梓州に行く。蜀を去ろうとの気持ちが

起こる。

玄武山(中江県)に行き【1130】題玄武禪師屋壁】を作る。

秋末から冬の初め、成都の草堂に住まう家族を、梓州に連れてくる。

〔十月、唐王朝とウイグルの連合軍が、再び東都洛陽を奪還。ウイグルは報償として洛陽の掠奪を許される〕

仲冬十一月、梓州の南、射洪県にあり。陳子昂ゆかりの地を訪ねる。〔1143〕

〔冬到金華山觀、因得故拾遺陳公學堂遺跡〕を作る。

生計の資を求め射洪県から、さらに南の通泉県に行く。

このころ三峡に下り、さらに東遊せんとの気持ち強い。

冬末、梓州に帰る。

〔十二月、劍南西山の諸州がみな吐蕃に占領される〕

このころ『118』『野人送朱桜』を作る（あるいは上元、宝応年間）。

52歳（763） 広徳元年 癸卯（閏正月）

763年1月19日〜764年2月6日（384日）

正月、梓州にあり。

〔正月、史朝義が自殺し、七年三ヶ月にわたる安史の乱が終結〕

この報を聞き狂喜して、洛陽の故郷に向かわんと歌い『1157』『聞官軍收河南河北』を作る。また呉越に遊ばんとの気持ちも起こる。

春、梓州西北の涪城県（綿州）に行く。また梓州近辺の牛頭寺、兜率寺、

恵義寺などの名寺に遊ぶ。

春、梓州を離れ、塩亭を過ぎ、閬州に行き、また梓州に帰る。

春、綿州に行き、さらに漢州に至る（漢州刺史の房琯が特進刑部尚書として返り咲き、都に呼び戻される）。

房琯が去った後、新任の漢州刺史の王氏と綿州刺史の杜氏と房公池で飲む。

引き返して涪城を経て、春の末、梓州に帰る。このころ梓州で『1206』

送路六侍御入朝』を作る。

夏、梓州にあり。

夏から秋、新任の梓州刺史の章彝との交流が盛ん。

〔七月、広徳と改元。河西、隴右の地が吐蕃に領有される〕

〔八月四日、房琯が帰路の閬州で死ぬ〕

〔嚴武、長安で京兆尹となる。ついで吏部侍郎を兼ねる〕

九月中旬、閬州に行く。房琯を祭る。

王閬州刺史のため、代宗に上奏する吐蕃政策を代作する。

吐蕃を防ぐには、高適に替わって嚴武が、劍南西川節度使の任に就いた

がよいとの考えを持つ。

晩秋、『1257』『王閬州筵、奉酬十一舅惜別之作』を作る。

〔十月、長安が吐蕃に占拠され、代宗は陝州に避難。十二月、長安に戻る〕

十月、十一月、引き続き閬州にあり。〔127』『江陵望幸』を作る。閬州では王刺史に歓待される。

〔十二月、成都の西北の松・維・保三州が吐蕃に領有される〕

十二月、梓州から妻が手紙で、娘の病を告げてくる。急ぎ（三ヶ月ぶり

に）閬州から梓州に帰る。

蜀を去り長江を下る準備が整い、梓州刺史の章彝が盛大な送別の宴を開く。

（杜甫は梓州で刺史の章彝から厚遇を受けたが、分を越えた章彝の行為

を暗に批判する詩を作っている）

弟の杜占が、成都の浣花草堂を点検しに帰る。

冬末、家族を伴い梓州から閬州へ移り、閬州で年を越す。このころ又は

翌年の春、『1439』『去蜀』を作る（通説では永泰元年夏五月、成都での作）。

53歳（764） 広徳二年 甲辰

764年2月7日〜765年1月25日（384日）

〔正月、劍南東川、西川が一道に合併され、嚴武が劍南節度使、成都尹

となる。西川節度使の高適は都へ召しかえされる〕

閬州にあり。遊覽するところ多し。『1301_閬山歌』『1302_閬水歌』『1313_玉台觀、二首』を作る。

長安の京兆功曹參軍(正七品下)に召されるも、就かず。蜀を去って南下する気持ちは揺るがず。

二月、嚴武の再任を聞き、嚴武の要請にこたえ、南下の計画を取りやめ、暮春、成都に戻る。閬州を去る前『1321_別房太尉墓』を作る。

成都に向かう旅中、『1322_將赴成都草堂、途中有作、先寄嚴鄭公、五首』を作る。

〔二月、嚴武は成都に章彝を召す。嚴武の意にそわぬ所があり、章彝を殺す〕

春から夏、成都郊外の浣花草堂にあり。『1323_春暉』『1326_四松』『1332_登樓』『1336_絶句二首』『1341_絶句四首』を作る。

六月、嚴武の幕府で節度參謀となる。通説では、このとき同時に檢校尚書工部員外郎に推薦される。

杜甫は草堂を離れ、単身成都城内に住まう。

このころ『1344_丹青引(贈曹將軍霸)』『1345_韋諷録事宅、觀曹將軍畫馬図歌』『1347_太子張舍人、遺織成褥段』『1348_憶昔、二首』を作る。

入幕後、嚴武との交流は公私ともに密接。秋、『1403_奉和嚴鄭公「軍城早秋」』『1405_宿府』を作る。

幕吏の生活を厭う気持ちが次第に強くなり、一度休暇をもらい草堂に帰る。

秋、成都または草堂で『1409_倦夜』を作る。一説に前年、閬州での作。任華、成都に来て杜甫に詩を送る。(杜甫を絶賛するその詩は、偽作説あり)

弟の杜穎が草堂を訪れ、杜観、杜豊、妹の健在の消息をもたらし、また齊州(山東省)に帰る。

草堂より成都に行き、幕吏の生活にもどる。『1416_奉觀嚴鄭公庁事、岷

山沱江画図、十韻』を作る。

初冬、再び休暇をもらって草堂に帰り、また成都にもどる。冬、成都で『1422_觀李固請司馬弟山水図、二首』を作る。

54歳(765年) 永泰元年 乙巳 (閏十月)

765年1月26日〜766年2月13日 (384日)

正月三日、草堂に帰り、まもなく節度參謀の職を辞す。その後も嚴武との関係は密接。

(陳尚君の説ではこの直後に檢校尚書工部員外郎に推薦される) 正月、友人の高適死す。

四月三十日、杜甫の最大の支援者で友人の嚴武が死す。

〔西山都知兵馬使の崔旰と士卒らが、嚴武の後任として、王崇俊を推戴する。崔旰は嚴武お気に入り(の將軍)〕

〔五月、郭英又が嚴武の後任となり、成都に至る。郭英又はその間の事情を知り、数日後に王崇俊を殺し、崔旰も殺そうと謀る〕

(一説に、杜甫の『0957_寄贈王十將軍承俊』は、嚴武の後任がまだ決まらないこの時期の作で、王十將軍=王承俊は王崇俊の誤記だとする。

その詩は、杜甫が王承俊から特別な待遇を得ていたことを感謝し、王承俊が嚴武後の後任として、全権を委任される大將軍にふさわしい、と詠じたものである。とすればこの詩は杜甫にとって甚だ不利となる)

最大の支援者である嚴武を失い、五月初めのころ、浣花草堂を去り、岷江(汶江)を下りはじめる。

(陳尚君説では、朝廷で員外郎の官に就くため、嚴武の死ぬ前、遅くとも三月暮春には浣花草堂を去る)

嘉州(樂山市)に下り、犍為を過ぎ、五月末から六月初め、戎州(宜賓市)に至り、長江に入る。

瀘州を経て、さらに長江を下り渝州(重慶市)に至る。渝州で嚴六侍御

56歳(767) 大暦二年 丁未

767年2月4日〜768年1月23日 (354日)

終年、夔州にあり。

晩春、弟の杜覲が夔州に来る。夏、杜覲は藍田(陝西省)に女性を娶りに行き、冬には江陵に住む。

一説に、春、西閣より赤甲に居を移す。簡錦松の説では、夔州入りした早い時期から赤甲(子陽山南麓)に住み、西閣にもしばしば宿泊していた、とする。

晩春三月、漢西に居を移す。通説では漢西は、白帝城の西の西漢水、即ち今の梅溪河の西岸。簡錦松の説では、漢西は白帝城の東の東漢水(草堂河)の西岸。(漢西の居は、東漢水が「」字型に蛇行する一段の角の内側にあつたので、北岸ともいえる)。漢西の居宅は、初め賃借りしていたが、後に四十畝の果樹園とともに購入。

夔州では、現地の賤民階層の伯夷、辛秀、信行、阿段、阿稽らが、使用人として杜甫の農的生活を支える。

家まわりの畑で野菜作りをし、蜜柑作りの経営管理を始める。

同時に東屯の地に自分の稲田を持ち、米作りの経営管理を始める。(通説では、柏茂琳が杜甫に漢西宅、果樹園四十畝を供与し、東屯の百頃の小田を管理させた、とする)

六月、行官の張望が稲田の水を補って帰って来たので詩を作る。

夏、虎を防ぐための柵を修理する。

秋、おそらくは側室を娶る。一説に妻の楊夫人が死に、現地の婦人と再婚し、詩では「山妻」と称した、と。

秋になり、牛で畑を耕しカブ作りをする。

仲秋八月ごろ、稲田の除草の詩を作る。

処罰覚悟で農民の窮乏を救おうとした、元結の詩に感動し『1938』同元使君「春陵行」を作る。

このころ、左耳が聞こえず、齒は半分が抜けている。翌年には手がふるえる。断酒する。

秋、漢西宅で『2014「日暮」』を作る。

九月九日、重陽の節句に『2036「登高」』を作る。またこのころ『2007「復愁、十二首」』を作る。

秋、稲田の収穫のため、漢西より東屯に居を移す。漢西の居宅は、娘婿の呉郎に貸し与える。『2023「又呈呉郎」』を作る。

東屯で米の収穫後、『2031「暫往白帝、復還東屯」』を作る。

十月十九日、夔州別駕の屋敷で公孫大娘の弟子、李十二娘の劍器の舞を見る。杜甫は六歳のころ公孫大娘の舞を見たことがある。『2064「観公孫大娘弟子舞劍器行、并序」』を作る。

蜜柑を収穫する。

この年の冬至は十一月二十三日にあたり『201「冬至」』を作る。

江陵の高官、知人たちに詩を送り、江陵に下る準備をする。

冬、記録的な大雪が降る。

57歳(768) 大暦三年 戊申 (閏六月)

768年1月24日〜769年2月10日 (384日)

南卿兄に漢西の果園四十畝を贈与する。

正月中旬、食糧や生活用品、書籍類を船に積み、家族を引き連れ、夔州を去る。

巫山県、峡州(湖北省宜昌)、宜都、松滋を経て、二月(通説では三月)、

江陵(荊州)に至る。

鄭審、李之芳と交流し、詩の応酬多し。李之芳はこの年の秋、江陵で死ぬ。

夏、江陵尹・荊南(江陵)節度使の衛伯玉の、新楼のお披露目の宴で詩を作る。

江陵では、最高権力者の衛伯玉からの厚遇は得られず。

鄭審、李之芳（李尚書）との交流が盛ん。〔2137〕書堂飲既、夜復邀李尚書、下馬月下、賦絶句』等を作る。このころ『2144〕短歌行、贈王郎司直』を作る。

家族をしばらく当陽（宜昌市に属す）の、弟杜観の居所にあずける。

一時期、金策のため「武陵」に行き、また江陵に戻る。

秋、家族を伴って江陵を去り、南の公安に至る。

年の暮れ、公安を去り、劉郎浦（石首市）を経て南下し、岳州（岳陽）に到る。〔2228〕登岳陽樓』を作る。

岳州で歳を越す。

58歳（769）大暦四年 己酉

769年2月11日～770年1月31日（355日）

正月、岳州を去り、潭州（長沙）に向かう。

洞庭湖に入り、青草湖に泊し、湘水（湘江）を遡り、白沙駅に宿る。喬口、銅官渚を過ぎ、新康、雙楓浦を経て、清明節（この年は二月二十二日）のころ、潭州に至る。

このころ引き続き左耳が聞こえず。右手が麻痺し、左手で字を書く。

岳麓山を訪ねる。

韋之晋を頼ろうとし、潭州を去り、南下して衡州（衡陽）へ向かう。まづ潭州から白馬潭、鑿石浦、津口、空靈岸、花石戍、そして晚洲を経る。

次に衡山県境に入り、南岳衡山を望見し、ようやく衡州に至る。

目当ての韋之晋は既に潭州刺史に転任しており、まもなく四月に死ぬ。

その訃報を衡州で聞く。

〔七月、韋之晋の後任として崔瓘が、潭州刺史・湖南都団練觀察処置使となり、善政を行う。杜甫は崔瓘を高く評価〕

夏、潭州に引き返し、潭州で歳を越す。

この年の秋、〔2311〕江漢』を作る。（異説多く、大暦元年、二年、三年説有り）

潭州では、一時期、下船して江閣で過ごす。また船上を居とし、また城内に住む。

59歳（770）大暦五年 庚戌

770年2月1日～770年12月21日（354日）

春、潭州にあり。かつて玄宗に寵愛された歌手の李龜年に会い、〔2331〕江南逢李龜年』を作る。

この年は三月三日にあたる小寒食を、船中で過ごし〔2332〕小寒食舟中作』を作る。このころ眼がかすんで見える。翌日、岳麓山に遊ぶ。

〔夏四月、湖南兵馬使の臧玠が潭州で乱を起こし、潭州刺史の崔瓘が殺される〕

兵火を逃れ衡州に赴く。

このころ杜甫には乳飲み子の娘がいる。一説に、三年前夔州で迎えた側室、または後妻の子とする。

この年、幼児が死に埋葬する。一説にこの幼女とする。

衡州（衡陽）から、耒水を遡って郴州に向かい、郴州刺史代行の崔偉を頼ろうとする。

耒陽（衡陽市の南）の方田駅に至り洪水に遭う。五日間船が進まず食料を欠くも、耒陽県令の撰氏より酒肉を送られ難を脱す。

郴州には向かわず、衡州にもどる。

六月、臧玠の乱がおさまり、衡州を去り潭州に戻る。

秋、潭州にあり。

漢陽から襄陽に行き、さらに長安へ帰ろうと思い、晩秋に潭州を発つ。通説では、冬、潭州（長沙）と岳州（岳陽）の間で客死する。このとき

の作とされる『2348〕風疾、舟中伏枕書懷、三十六韻、奉呈湖南親友』

が絶筆となる。一説に岳州に至る手前、汨羅江の昌江で翌年春に死す。一説に秋以後、耒陽で死ぬ。死骸を納めた柩は岳州に運ばれ、正式に郷里に葬られるまで岳州に安置。

唐代から北宋までは、杜甫は耒陽で死んだ、と広く考えられていた。

杜甫の墓は耒陽、昌江(平江)、岳陽、河南の偃師、鞏県のほか、何ヶ所かにある。

杜甫がいつ、どこで死んだかは、いまだに議論が多く、真相は永遠の謎(後藤秋正)。

(775) 大暦十年 乙卯

775年2月5日～776年1月25日 (355日)

正妻の楊婦人は四十九歳で死んだが、その生年と没年は分らない。もしも楊婦人が結婚時に、当時の一般的な結婚年齢と同じくらい、十五歳ころであったと仮定すれば、このころ楊婦人が死んだことになる。またその生年は七二七年となる。

もしも楊婦人が、一説に言うように杜甫五十六歳時に夔州で死んだとすれば、その生年は七一九年となる。

(813) 憲宗・元和八年 癸巳

813年2月5日～814年1月24日 (354日)

次男の宗武の子の杜嗣業が、祖父である杜甫の柩を、岳州(一説に耒陽)から洛陽の東、偃師県の首陽山のもとに移す。一説に虚構とする。

途中、杜嗣業が江陵を通過したとき、江陵府士曹参軍として左遷されていた元稹に、墓誌銘を依頼する。

杜甫の死より四十三年後のことである。

古川末喜(佐賀大学 文化教育学部 日本・アジア文化講座)